

環境・防災対策調査特別委員会会議記録

環境・防災対策調査特別委員会委員長 喜多 正敏

1 日時

平成 26 年 9 月 3 日（水曜日）

午前 10 時 3 分開会、午前 11 時 46 分散会

2 場所

第 2 委員会室

3 出席委員

喜多正敏委員長、佐々木茂光副委員長、高橋孝眞委員、小田島峰雄委員、高橋昌造委員、工藤大輔委員、田村誠委員、高橋元委員、小西和子委員、高田一郎委員、五日市王委員

4 欠席委員

なし

5 事務局職員

大山担当書記、小田澤担当書記

6 説明のため出席した者

ひょうごボランティアプラザ 災害支援アドバイザー 高橋守雄氏

7 一般傍聴者

なし

8 会議に付した事件

(1)調査

東日本大震災から 3 年 6 ヶ月 兵庫県の被災地支援活動について

(2)その他

次回の委員会運営等について

9 議事の内容

○喜多正敏委員長 それでは、これより本日の会議を開きます。

本日は、お手元に配付いたしております日程のとおり、東日本大震災から 3 年 6 カ月、兵庫県の被災地支援活動について調査を行いたいと思います。

本日は、講師としてひょうごボランティアプラザ災害支援アドバイザーの高橋守雄様をお招きいたしておりますので、御紹介いたします。

○高橋守雄講師 よろしくお願いいいたします。

○喜多正敏委員長 高橋様の御略歴等につきましては、お手元に配付している資料のとおりでございます。

本日は、高橋様から東日本大震災から 3 年 6 カ月、兵庫県の被災地支援活動についてと

題しまして、阪神・淡路大震災からの復旧・復興の教訓を踏まえ、東日本大震災からの復旧・復興の支援に全力で取り組むひょうごボランティアプラザの活動などについてお話をいただくこととなってございます。

高橋様におかれましては、御多忙のところ、このたびの御講演をお引き受けいただきまして、改めて感謝を申し上げます。ありがとうございます。また、本県沿岸地域においてもさまざまな支援活動を行われていることについて、重ねて感謝を申し上げます。

これから講師のお話をいただくことといたしますが、後ほど高橋様を交えての質疑、意見交換の時間を設けておりますので、御了承願いたいと思います。

それでは、高橋様よろしくお願いたします。

○高橋守雄講師 皆さん、おはようございます。ただいま喜多委員長に御紹介いただきました兵庫県の高橋守雄と申します。きょうは、高橋姓の委員が多いので、高橋族としてはうれしい限りでございます。

喜多委員長とは全国災害ボランティア議員連盟の関係でお会いして、きょうお招きいただきました。また、当事務局の大山さんには大変お世話になりました。それときょう取材で来られています岩手日報には、東日本大震災からちょうど3年3カ月の6月11日に、岩手日報の紙面の1面全部を使いまして、私ども兵庫県の東日本大震災支援、そして今ボランティアを取り巻くいろいろな課題について提言させてもらった覚えがあります。きょうは本当にこんな貴重な時間をいただきまして、ありがとうございます。資料はたくさんありますけれども、抜粋しながらお話ししたいと思います。

実は皆さん、この麻雀牌、こちらは普通の大きさなのですが、こちらはコミュニケーション麻雀と言います。私どもがおとといから岩手県、宮城県、福島県の16カ所の仮設住宅とか社会福祉協議会に行きまして、いわゆる仮設住宅のコミュニケーションの、そしてこれから建ち得るだろう復興住宅の新たなコミュニティーづくりのツールとしてお使いになってくださいと広めているのですが、もう既に岩手県でも使ってもらっています。それをさらに普及、啓発するというので、指導員、社会福祉協議会の職員、そして生活支援員の皆さんにこの1週間、被災3県を回りまして講習をしたいと思っています。

私は、後から追いかけておりまして、きのう花巻南温泉の愛隣館というところに泊まったのですが、遅く入って朝6時に出たものですから、全然雰囲気味わわずにここへ来ました。そういうことで、これからお話しします。

ひょうごボランティアプラザという名前なのですが、実は阪神・淡路大震災が起きたときを防災とボランティアの日と国で定められました。9月1日は防災の日ですが、1月17日が防災とボランティアの日と位置づけられたのです。その後、兵庫県がボランティアとか、NPOとか、災害支援の拠点として神戸市に100億円の基金を積んでつくっています。その利子は全てボランティアとかNPOに助成をするという形でひょうごボランティアプラザができて今12年目です。このように、兵庫県内のボランティアが無料で使える印刷機とか会議室を設けています。

平成17年ですが、阪神・淡路大震災発生から10年のときに天皇皇后両陛下が私どもの事務所に来て多くのボランティアとかNPOの方とお話をさせていただきました。略歴にありますように、実は私はそもそも、お巡りさんなのです。兵庫県警察で警部補までしまして、15年間、青少年の育成補導とかいろいろな活動をして、知事部局にかわりまして、兵庫県のほうで30年お世話になりました。途中、坂井時忠知事の秘書をしたり、阪神・淡路大震災のときは兵庫県の広報課で報道担当をしたりしていました。第1回の災害対策本部会議からずっと入って、世界から来られるマスコミの方に対応したり、貝原俊民知事のすぐ横において、いろいろな取材とかに係る資料をつくったり、そういう対応をしていました。それも含めて阪神・淡路大震災から来年で20年になるのですが、私の仕事の中身はボランティア支援とか、NPO支援、そして県民運動、ふるさとづくり、そういう県民や市民とかかわるものがほとんどでした。今はひょうごボランティアプラザで、私は現役で5年おりましたけれども、その後も6年目に入っていて、OBとなっても今の井戸敏三知事はやめさせてくれません。

そういうことで、私は東日本大震災を中心に国内の災害にボランティアに入っています。九州地方や、最近では広島県の水害とか、兵庫県内でもデカンショ節で有名な丹波地域がひどい水害で今やられています。その隣の福知山市もやられています。そういうところにきのうときょう、兵庫県のボランティアが、ひょうごボランティアプラザでバスを仕立ててボランティアに入っています。来週ぐらいに広島県に行こうかなと思ったりして、そういうことをずっと毎日やっています。私はボランティアでコミュニケーション麻雀協会の会長をしているものですから、高齢者の対策でこの1週間東北の復興住宅に来させていだいて、5日に帰って、すぐ6日には丹波市にボランティアに入るといって、そういう慌ただしい毎日を送っています。そういう中で、岩手県の環境・防災対策調査特別委員会でお話しさせていただくことを本当に光栄に思っております。では、今から私どもの東日本大震災支援のお話をしていきたいと思えます。

その前に、2府5県や神戸市などが入っている関西広域連合という組織があります。座長は兵庫県の井戸敏三知事なのですが、東日本大震災が起きてから関西広域連合で支援する拠点がダブってはいけませんので、府県を分けましょうということで、私ども兵庫県は宮城県を中心にならずに被災地に入っております。しかし、いろいろなNPO、ボランティアグループ、そして市民の方も岩手県や福島県に入ってもらっています。そういうことも含めましてお話ししたい。私も野田村、大槌町、大船渡市、陸前高田市なんかにもよく行っております。それをちょっと念頭に置いて、宮城県の話が多いなと思えますが、実はいろいろなところでやっているということです。

もうご当地ですので、言うまでもありませんが、阪神・淡路大震災は平成7年1月17日の5時46分に発生、東日本大震災は3月11日の14時46分に発生と、46分という同じ時間なのです。もう一つ、46分という不思議な時間、それはアメリカ同時多発テロ事件でニューヨークのビルに1番機が突入したのが8時46分なのです。46分というのは歴史の

中でいろいろな悲劇の起きる時間という、そういう余り思いたくないような時間なのです。

最新の情報では、8月8日現在で、東日本大震災で1万5,889名の方が亡くなられて、2,609名の方が行方不明となっております。避難者は仮設住宅も含めまして全国の47都道府県に24万7,000名の方が避難されております。兵庫県にも900名以上の方が避難されて、今お住まいでございます。

阪神・淡路大震災では、ピーク時に31万人、この数は震災が起きて半年、避難所から仮設住宅に受け入れた人数ですね。これが阪神・淡路大震災のときは5年間で仮設住宅は全部解消しまして、復興住宅とか民間のマンションなんかに入られています。

しかし、東日本大震災は3年6カ月過ぎようとしている中でもまだ25万人近くの方が避難所とか仮設住宅にお住まいです。阪神・淡路大震災は20年でも一部いろいろな課題が残っていますが、福島県も含めまして、東日本大震災の復興の過程は、やはり30年、40年かかるのではないかと思っています。だからこそ、私たちは全国から日本の復興につながるということで東日本をずっと見詰める。特に兵庫県の場合は、阪神・淡路大震災で国内外のたくさんの方からいろいろな支援を受けました。その恩返しという気持ちが今も脈々と兵庫県民の中には流れている。だから、兵庫県と岩手県でも、兵庫県と宮城県でも、距離感がないのです。

私は毎月1回か2回、ボランティアと一緒に13時間、片道900キロの道をバスで来るのですが、晩に出れば朝には宮城県なり岩手県に入ります。野田村に行ったときには16時間か17時間かかりました。そういう時間も苦にせずに行くわけです。それは、全国高等学校野球選手権大会のときは反対に皆さんがバスで東北地方からどんどん甲子園へ応援に来られる、その逆ですからいとも簡単といえますけれども、多くの方が東日本大震災の被災地に入っている。

東日本大震災のボランティアの活動者数、これは統計をとっているのが全国社会福祉協議会です。ほかにどこも統計はとられていないのです。平成26年7月末のデータが出ています。皆さんのお手元の資料では平成26年2月末で48万人の方が岩手県に入ったと言われていますが、この3年4カ月、138万人の方が被災3県にボランティアに入ったという数字は全国社会福祉協議会でつかんでいます。これ以上にボランティアとか、NPOとか、個人で入られた方はたくさんおられますが、その数はもっともっとふえると思います。

直近の平成26年7月のデータでは、岩手県には50万人の方が全国からボランティアに入っております。しかし、1カ月3,000人ですから30で割りますと1日大体100人前後のボランティアしか入っていない。福島県にしましたら、もう60名ぐらいなのです。

やはり毎月11日になりますと月命日で被災地のニュースがいろいろな話題になりますけれども、今、首都圏ではいろいろな事象があつて、きょうは内閣改造とかいろいろなニュースがありますが、関西や他府県ではなかなか話題にならなくなる。阪神・淡路大震災なんかは、とうの昔の話になってしまうのです。今の高校生、大学生にしても生まれていない時の話ですから、大災害といえば東日本大震災ということとなっているのです。だ

から、本当にたくさんの兵庫県の高校生、大学生が被災地に入っています。

ですから、阪神・淡路大震災も一緒ですが、風化させない、そして継続支援していくということを訴えながら、決して東北を忘れてはならないということを私たちは言っています。そして、多くの東北の先生方とか、学者が関西に来て、東北を忘れないでほしいというお話も結構されています。

今言いましたように、東日本大震災は3年4カ月で138万人のボランティアがおりますが、阪神・淡路大震災のときに3年4カ月でどのぐらいかといいますと191万人なのです。数字上では東日本大震災の方が約50万人近く少ないのです。3年4カ月たった時点でも1日500人のボランティアが阪神・淡路大震災のときは入ってくれていました。けれども、今言いましたように岩手県すら100名、福島県はもっと少ないです。ですから、私はいろいろなところで声を大にして東日本大震災を忘れてはならないということをずっと言い続けております。

途中で、兵庫県のボランティア3,000名にアンケートをしました。これは他府県では例がなく、10代、20代、30代の方が多いのです。というのは、高校生や大学生、たまに中学生から東日本大震災の被災地にボランティアに行きたいという声があれば、私どもはそれを具体化、実現化してあげているのです。実は東日本大震災が発生してから、兵庫県が議会で審議していただきまして東日本だけに行くためのバス代の支援として4,500万円の予算をつけているのです。この5月までは4日間行きまして、バス運転手が2人で大体四、五十万円で行けております。けれども、平成26年7月以降、高速道路の長距離バスとか夜行バスの制限が加わって、基準が厳しくなって、そして単価も上がってきました。今は70万円ぐらいになっています。大体夏ぐらいまで派遣が過ぎていきますけれども、バス代がネックになっています。兵庫県の場合はいつまでも予算をつけ続けると思いますが、全国からは、そういう予算をつけてもバス代が莫大に高い。後から話しますが、個人で飛行機や新幹線で行こうと思えば関西から5万円、6万円かかる。そういう中で、復興庁もことしの7月に東北ボランティアへ行こうというキャンペーンをしました。けれども、その費用を国が支援します、援助しますよとは一言も書いていません。

広島県の災害もそうですが、災害イコールボランティアと、すぐにニュースになるのです。自衛隊や警察はお給料をもらいながら同じ泥かきをされます。しかし、ボランティアは手作業なのです。この間も皆さん見られたと思いますけれども、大船渡市から広島県にすぐに入られた方のことがニュースになっていましたけれども、恐らく1週間おられればもう飛行機代とか新幹線代に往復で五、六万円、宿泊代を入れますと七、八万円のお金がかかる。ですから、今広島県の方々は、とりあえず広島県内だけでボランティアしようとなっていますが、きのう全部解除されましたので、来週ぐらいから全国からボランティアが来られると思います。

兵庫県の自慢ばかりして悪いのですが、今東北支援に兵庫県は4,500万円予算をつけていますが、その他国内で災害が起きたときにすぐボランティアに行かなければならないだ

ろうということで、ほかの費用でバス代に 200 万円の予算をつけています。ですから、今兵庫県内の丹波市とか、隣の福知山市とか、広島県に行こうと思えば、すぐに実行できるよう予算化されている。これは使わない年もありますが、それを一々庁内で上げていくと日数がかかるのです。だから、私どもひょうごボランティアプラザで報告伺いはしますが、すぐに被災地に入れるように、使い方、行き方、日にちとか全部権限を任されていて、ボランティアもやっぱり今機動力、スピードが求められているのです。

私も広島県の水害の二、三日後に被災地に入りましたが、規制区域が広くて、お住まいの方がなかなか家に帰っておられませんから、ボランティアは屋内に入れず、周りの泥かきだけになります。

実は、東北でも最初は、宮城県とか岩手県に入るにしても、ボランティアがうちに来たら、避難所から帰ってきてボランティアの世話ではないのですけれども、見ておかなければいけないので、二重の苦勞をかけてしまうということがありました。また、ボランティアがすぐに入ってもらったら、どこの誰かなかなかわかりませんということがありました。兵庫県の場合はジャンパーとか帽子で兵庫県のボランティアと表からすぐわかるようにして、被災者の方が安心してきょう一日、ボランティアの皆さんに頼みますよと、また避難所に帰ってゆっくりしてもらえる。やはり身分を明らかにする、そういう証が要ということ。今は広島県も空き巣や泥棒が入っていますので、ボランティアセンターで受け付けした場合にボランティアであるシールを張ってもらって、おうちに泥かきに入っても、疲れている被災者がまた避難所で安心してゆっくりしてもらえるように、そういう安心感を与えるボランティアが今求められているのです。ですから、家を留守にするとなかなか安心しておけないということだけでなく、本当の善意が善意を生んでくるという、そういう世界で成り立っています。先ほど言いましたように、ボランティアに行きたい気持ちがある、あるいは東北に 4 日間来ても大体四、五千円の宿泊代を出せば行ってもらえますよということで、だから 10 代、20 代が兵庫県の場合は多いのです。他府県では、なかなか例はありません。

阪神・淡路大震災のときも、当初のボランティアは、実は 10 代、20 代、30 代、40 代が 8 割、9 割だったのです。皆さんはニュースで御存じかと思いますが、阪神・淡路大震災は高速道路が倒壊し火災があつて、鉄道も施設も全部ストップになりました。しかし、東西南北から若い人たちがリュックを背負って徒歩や自転車で被災地に入ってきました。だから、阪神・淡路大震災の当初は若いボランティアがいっぱいだったということです。

東日本大震災では、あなたはどのような気持ちで行かれますかというアンケートですが、阪神・淡路大震災で助けてもらった恩返しをしたいという方が 4 割を占めます。そういう気持ちの方が、20 年たった今も多いということです。

これからお見せします表は皆さんのお手元にありますが、この赤字はひょうごボランティアプラザで公募した一般ボランティアのバスなのです。この黒字は、兵庫県内の高校、大学を中心に、そこが計画して、私たちも一緒に計画に乗って出したバスなのです。平成

23年度、24年度の2年間で兵庫県から153台のバスを出しています。約3,500名のボランティアのほかにも社会福祉協議会が独自で行かれています。

平成25年度、昨年1年間でも58台、1,400名のボランティアが被災地に行っています。この中にありますが、宮古市、陸前高田市、釜石市とかへもずっと来られています。

平成26年度ですが、9月4日から兵庫県立大学が南三陸町へ入りますが、この7月、8月には東日本大震災が始まって以来、毎日のように兵庫県内の高校や中学、大学が被災地に入ってくれています。これは、1年生の学生が3年生の先輩が被災地に入ってボランティアしたのを見て、そういう話を伝統的にするものですから、自分たちも2年生、3年生のときに行きたいと学校の校長先生方が全て計画を持ってこられます。そういう気持ちを私どもは予算の中で全部執行させてもらっておりまして、ずっとこちらにお伺いしています。後から見せますが、兵庫県立相生産業高校は釜石市に3年連続で入ってくれています、福島県いわき市にも入ったりしています。

そういうことで、ことし7月から8月、ずっと毎日のように兵庫県のボランティアが忘れずに継続して被災地に入っているのです。

実は、兵庫県議会のほうで御承認いただきまして、10人か15人のグループで被災地にバスで入りたいということがあれば最高20万円を補助しましょうという制度があります。これは神戸市から行くバス代だけではなくて、例えば新幹線、飛行機で行って、被災3県を回るときのバス代に使ってもいいですよという使い勝手のいい制度にしています。20万円という、当時半額程度でしたけれども、そこまで助成をしております。

阪神・淡路大震災のことを挙げますと亡くなった方の9割が家の倒壊、長田地区の火災によるものです。東日本大震災は、亡くなられた方の9割が津波による死因と言われています。

兵庫県の場合は、若い人たちがボランティアで東北に行ったりして、阪神・淡路大震災でも活躍しました。それを一過性にする事なく、学校を卒業してもひょうご若者災害ボランティア隊というのをつくっております。彼らには、国内で災害が起きれば先遣隊要員としてすぐに飛んでもらう、私たちのスタッフと一緒にマイカーや公用車ですぐに被災地に入って、被災地のニーズとか、大型バスはだめだとかいう交通情報を送ってもらっています。これは一昨年写真で、兵庫県の井戸敏三知事なのですが、若い高校生、大学生が主体です。

東日本大震災から1週間たった3月18日に兵庫県の井戸敏三知事を先頭に医師団とか、看護師を連れてバス4台で東北に入りました。井戸敏三知事は昔宮城県で財政課長をしていたものですから、そのときにどこを中心に入ろうかというのは大体決めていたのです。兵庫県の場合は、東日本大震災から1週間後ですから電話とかは全然つながらなかった中で、松島町だけが唯一つながったのです。今宮城県庁に帰っていますが、当時の松島町の副町長が阪神・淡路大震災のときに長田地区にボランティアに入られた経験があつて、ボランティアのいわゆる受援ですね、なかなか受け入れ体制が整わない。お手元にありま

す、岩手県防災ボランティア活動推進指針にも受援のことが書いてあります。支援はなんぼでもありますが、ボランティアに来てほしいけれども、なかなか受援体制が整わない。受援体制をどう素早くつくるかというのがこれからの防災だと思うのです。

まず、広島県でも県内だけに絞りましたね。支援に行きたい人は全国にいます。けれども、受援するスタッフや道具がそろわない。日数もかかります。兵庫県の丹波市も最初は丹波市内に限りで、ほかは団体だけになっていたのですが、隣の丹波デカンショ節の篠山市から個人で入れない、そういうことはおかしいではないかということで全部広げてもらいました。やはり一番のネックは受援体制、受け入れ側のスタッフがそろつかそろわないかということです。東日本大震災でも社会福祉協議会の職員が被災されたり、事務所が流されたりしました。だから、いろいろな体制が整うまでは時間がかかりました。

兵庫県の神戸駅の南に川崎重工業本社ビルがあるのですが、このビルの6階、7階を兵庫県がテナントでお借りしています。ここからバス4台で大体900キロ、片道13時間の道を走って被災地に入りました。夜に神戸市を出て、北陸を通過して、新潟県から磐越を通過して被災地に入ります。これが一般的なコースです。

この写真は、嶋基宏日本プロ野球選手会会長ですが、私ども兵庫県のボランティアと東北楽天ゴールデンイーグルスとのかかわりがございます。実は東日本大震災が起きた3月11日は東北楽天が兵庫県の明石球場で千葉ロッテマリーンズとオープン戦をしていたのです。そのときに地震があつて、嶋会長以下選手たちは心配で、心配で、すぐに東北に帰って家族やみんなと会いたいということになったのですが、延期になりましたけれども、公式戦を目指して練習しなければならないことで、東北楽天の選手は甲子園球場とか、ほっともつとフィールド神戸とかを使って練習していたのです。東北に帰れないけれども、何かをしたい。そのときに選手たちの目に映ったのは、私ども兵庫県のボランティアが被災地に行くバスです。炊き出しをしているニュースを選手たちは知ることになるのです。嶋会長から私宛てにぜひ応援支援させてほしいと連絡がありました。平成23年3月23日に出発して、24日に東松島市の方とかに炊き出ししましたけれども、選手たちはその炊き出しの材料を買って、材料の入った箱に激励のメッセージを全部書いて、練習を早く終えてボランティアバスに積み込む作業をしてくれたり、メジャーリーグに行っています田中将大投手とか、岩隈久志投手は神戸市三宮で募金活動をしたりしてくれました。そういうことがありまして、東北楽天と私ども兵庫県のボランティアとのつながりがあつて、ずっとお互いに励まし合つてきょうまで来ています。

特に3月から4月、5月、6月と夏になりますので、東北楽天選手会の皆さんが兵庫県のボランティアの皆さんに、この楽天カラーの帽子を1,800個つくってくれまして、もう足りませんから、追加で私どもがつくっていますが、兵庫県のボランティアは着ています。だから、先ほど言いましたように帽子を着て、ジャンパーを着て、それがボランティアの目印で、安心してボランティアしてもらえるとということで、これも阪神・淡路大震災のときからの一つの私たちの貴重な教訓、体験なのです。

兵庫県にはヴィッセル神戸という日本プロサッカーリーグのサッカークラブがあります。東北楽天が帽子にするなら、私どもは夏のビブス、夏用のジャンパーにしましょうと、ヴィッセル神戸から贈呈されました。また、東京ディズニーリゾートが津波で水害にあいましたので、大阪のユニバーサル・スタジオ・ジャパンから一緒に支援をしましょうということで子供たちのグッズの寄贈とか、キャラクターに東北に行ってもらおうとかして、被災地支援を今も行っています。

先ほど阪神・淡路大震災がボランティア元年と言いました。東日本大震災は企業ボランティア元年と言われております。日本イーライリリー、前田道路とかありますが、企業の方々が競って、最初は義援金を寄附されました。東芝とか、ソニーとか、いろいろな大手企業が1億円、2億円と義援金を寄附されました。今3年たってまた企業が見える支援をしたいということで、いろいろなことをやられました。私どもは継続して毎月、毎週のように被災地に入っていますので、いろいろな企業から、このコミュニケーション麻雀を配るのにお金が要るだろうから、これを買って被災地に送ってほしいなど企業からの申し出を受けることが大変多くなりました。きのうも石巻市に行きましたら、被災地の商店街の真ん中に石巻市子どもセンターという立派な木造の児童館ができていますね。それはサントリーがお金を出して、石巻市に寄附しているのです。運営は社会福祉協議会とかそういうところでやっておられます。そういうぐあいに企業から、3年半たった今、新たに何かをしたいという申し出があります。だから、私どもは東日本大震災が企業ボランティア元年というような言い方をしております。

先ほど言いましたように、今災害イコールボランティアで話題になります。昔だったら泥よけとかのいろいろな作業は、いわゆる建設会社が有料でやっていたのです。今は大がかりなものは大きな重機を持っている建設会社がしますが、自衛隊、警察もやります。だけれども、その人たちはみんなお給料をもらっているわけです。ボランティアが1万人入った、1,000人入ったとニュースや新聞に出ますが、どこから来ようともボランティアのモットーは自己完結なのです。全て自分で責任を持って、自分でお金出して、自分で行って、自分の希望でやるという自己完結なのです。だけれども、災害列島日本と言われる中で、今から南海トラフ巨大地震、首都直下型地震が起きるかもしれません。こういう日本でこそ災害ボランティアを支援する、そういう仕組みとか環境が必要ではないでしょうかということで、喜多委員長も入っておられますが、全国災害ボランティア議員連盟というのがあります。これは超党派で新潟県の旧山古志村元村長の長島忠美先生が会長なのです。この方を中心にタイアップしながら、日本で災害ボランティアに何か支援、助成する制度をつくらうではないかということで、今全国で署名活動をしています。御当地大船渡市や陸前高田市でもやりました。そういうことで、全国に進める会の応援団がもう265名いて、その方々がずっと全国で展開しています。

ひょうごボランティアプラザに災害ボランティア割引制度を実現する会の事務局を持っていて、スマートフォンでも、インターネットでも、オンラインで署名できるように

やっています。ことしの1月17日、阪神・淡路大震災発生から19年のときに、災害ボランティア割引制度を実現する会を発会したのですが、この方は東北大学の村松淳司先生で被災地のボランティア受け入れのコーディネーター、そして今伝道師となって東日本大震災を忘れないでほしいと関西でたくさん講演されています。こちらは、宮城県の名取市閑上の地域で被災された方です。この後ろにおられるのは、閑上地区から避難した愛島東部仮設住宅の皆さんで、ちょうどそのときに神戸市にいられていましたが、今ボランティアが少なくなっているからぜひ来てくださいという呼びかけを一緒にしていただきました。皆さんのお手元にチラシを置いていますが、兵庫県から行っている学生ボランティアはお世話になって、こういうぐあいに災害ボランティア割引制度を実現しようという運動を今全国的に行っています。来年には国のほうに同意書等を持っていきます。この写真は、長島忠美先生ですね、こちらは全国災害ボランティア議員連盟事務局長をしている福井県の細川かをり議員です。

先ほど神戸市で全国災害ボランティア議員連盟研修会でもお話をしました。

この写真は、国会議員とか、全国の議員を集めた勉強会で東京の参議院会館でお話をさせていただきまして、そして分科会で災害ボランティア支援法というものを時限立法で制定してはどうだろうかという提案もありまして、そういうことも今から議論していこうと思っています。

実は、私や長島忠美先生や喜多正敏先生だけが叫んでいるのではないのです。東日本大震災の被災地でボランティアが減っている原因は何でしょうということで、平成25年10月に内閣府がいろいろな関係者、ボランティアにアンケートをとったのです。やっぱり宿泊代や交通費がかさむということで行けないのだという方々が40.6%おるということを内閣府の防災担当でも認識しているのです。認識していますけれども、ボランティアに行ってくれ、行ってくれと言うわけです。そういうずれを私たちが何とか解消していかなければならない。国のほうで何とか考えてくださいというのが先ほどの提案の理由なのです。

この画像は私どもひょうごボランティアプラザのホームページですが、トップ画面の災害ボランティア割引制度オンライン署名というところをクリックしますと、すぐに署名できるようになっています。今お願いしているのは学校ごと、グループごと、企業ごと、NPOごと、ボランティアごと、代表の方のお名前があれば複数の方の賛同者数を入力するだけでいいのです。学校でありますと生徒数の500名とか700名とか、そういう数でお願いしております。ぜひまたごらんください。

高校生、大学生が兵庫県元町駅から始めた活動です。東京の日比谷公園でも行いました。陸前高田市の奇跡の一本松の前の駐車場や大船渡市でもことしの3月12日に猛吹雪の中で行いました。

実は、先ほど企業ボランティアと言いましたが、去年のちょうど今ごろ、伊豆大島に台風水害がありました。そのときに、大島に渡る東海汽船というフェリー会社が災害ボランティアに入った方々の帰りの船賃は3割引きましようとする自主的に企業貢献、社会貢献でや

っていただきまして、3,000人以上利用しました。企業にとっては物すごいマイナスですが、いろいろなニュースで流れましたから、メリットはあったと思います。同じく伊豆大島にあります大島温泉ホテルもボランティアだったら宿泊費を3,000円引きましょと、企業努力でこういう制度をやっておりました。

東日本大震災でも平成23年5月14日から6月13日まで1カ月間、仙台から盛岡間の新幹線停車駅から東京行きのやまびこの自由席特急料金を5割引ましょという制度があったのです。それはボランティアの方であろうと、それから一般の方であろうと、5割引です。だから、1カ月だけなのです。高速道路は、阪神間から、全国九州から来ても1年間支援車両は無料だったのです。災害救助法が適用されたら、二、三日後に、九州から乗ろうと、北海道から乗ろうと高速道路を走る支援車両は1年間だけ無料なのです。今は福島県の方に限って、福島第一原子力発電所事故の被災者であるという証明があれば、高速道路は無料で使えるという制度は残っています。だけれども、岩手県に入っても、宮城県に入っても、他府県の者が行くと高速道路料金は今取られます。神戸市から東北に行くと高速道路料金が片道で四、五万円かかるのです。広島県や兵庫県丹波市は今災害救助法が適用されています。道路は災害救助法がすぐに適用になります。だから、ボランティアも災害救助法ができれば一定の証明、一定の書類があったら帰りの電車賃、飛行機賃ぐらいまけてよと。噴火がありました有珠山では、ボランティアが本土からたくさん来ました。当時の日本航空、全日本空輸、それから東亜国内航空が、一定の期間ですけれども帰りの飛行機は各便80席をボランティア用に無料にされたのです。そういうぐあいに企業側から見ると、そういう制度の活用というのがあるのですが、いつまでも企業、民間に頼ってばかりはいられない。やっぱり災害列島日本と国が言うならば、そういう制度があってもいいのではないかと思うのです。

私は本当に思うのですが、国が動く前に岩手県議会で、来たボランティアに何か補助する制度を全国で初めてつくってもらったら、全国もそれをまねしてくるのではないか。例えば岩手県から広島県に行きたい、けれども個人で行った場合、バス代が莫大である。そういう一定の証明があったら地元のボランティアセンターとか、岩手県の何かの公的機関で証明があれば助成、還付するとか、そういう制度を宮城県でも、岩手県でも、福島県でも先駆的にあればなと思ったりはしています。それによって国を動かし、全国を動かしていく。本当にボランティアが少なくなっている。来てほしいではなくて、宿代の半分でも出そうとか、旅館組合も協力ましょとか、岩手県がボランティアに何がしのことをしてくれるとかそういう制度があってもいいのではないか。そういうことは反対をする人も結構おられます。ボランティアは完全自活だ、完全に社会貢献だと言われますが、やはりこれだけ災害がありながら、遠いところから行こうと思ってもなかなか行けないのが日本の制度です。これを日本でつくれば、世界で初めての制度になるのです。そういうことで取り組んでいただきたい。

来年の1月17日に阪神・淡路大震災20年の節目を迎えます。希望の灯りというモニュ

メントがあります、神戸市の東遊園地で地震発生時刻の5時46分に追悼式をやられるのです。その追悼式に、JRとか私鉄のダイヤは全部間に合うのです。肝心かなめの神戸市営地下鉄は間に合わないのです。ポートアイランドという島がありますが、そこから来るポートライナーの沿線住民が追悼式に間に合わないで、ダイヤを早めてほしいという運動をこの夏にやりまして、ほぼ実現することになりました。これは私が取り組んでいるということで、この間神戸市に提出したのですが、実現を前提に検討しますということで20年の節目に被災者が住んでいる地下鉄沿線から多くの市民が来られると思います。ちょうど土曜日になりますので、来年1月16日、17日、ぜひ神戸市のほうにお越し願えればと思っております。

初めてひょうごボランティアプラザで一般公募したボランティアバス派遣ですが、平成23年3月23日は神戸市など、いわゆる公的な機関で行きました。私どもの部屋にボランティア準備室を設けています。ここで冬用、夏用の毛布やスコップとかじょうれんなど、いろいろな災害のグッズをいっぱい並べています。ここにボランティア受け付け専用電話というのを3本引いているのです。朝9時半から受け付けするのですが、もう電話は鳴りっ放しなのです。30分で40名でも、50名でも、どこに派遣になろうともあつという間にボランティアがいっぱいになります。

災害が起きれば、兵庫県の方々は私たちのひょうごボランティアプラザのホームページを見るという習性がありまして、もうボランティア受け付け専用電話が鳴りっ放しになる。電話がかかったころにはもう定員いっぱいになったとお断りするので、事務所にまた抗議電話がかかってくる。阪神・淡路大震災から20年がたっても兵庫県のボランティアに対するニーズは高いのです。岩手県に行きますよ、宮城県に行きますよ、広島県に行きますよ、九州に行きますよと言っても、もうボランティアがいっぱいになります。これは本当にすごいのです。兵庫県が、神戸市が復興したのは全国の皆さんのおかげと、特に高齢の方なんかは本当にボランティアに行かれます。最高年齢は92歳で、淡路市の女性ですけれども、自分が被災したときの恩返しをしたいと3回来られました。

そういうことで、若い人も、お年寄りも来られます。震災から2週間後には現地にやってきて、最初は松島町の海岸の泥かきとか、避難所での炊き出しをしました。東松島市の大曲地区で、こういうハードなボランティアから、ソフトなボランティアもやっています。兵庫県立舞子高校が全国で初めて環境防災科をつくっています。今度は宮城県多賀城高校が来年の4月から全国で2校目の環境防災の学科をつくります。兵庫県では県立舞子高校の子供たちがいろいろな県の高校生にこういうすばらしい効果を発揮してくれています。

兵庫県には福島県の方を中心にかくさんの被災者の方が来られています。兵庫県に避難しながら被災地に行こうという里帰りボランティアバスも行いました。このときは福島県と宮城県をやったりしています。兵庫県の子育てグループのNPOがありまして、クリスマスに被災地の子供を相手にプレゼントして回ろうということで、神戸市から一番北は野田村までバスで直行しました。この野田村から宮城県、福島県において、3県を回ったボ

ランティアバスです。走行距離が往復で2,600キロ、ちょうど沖縄県から北海道稚内市までの距離をバスに乗って、被災地の子供たちに神戸市にある菓子屋のお菓子を持って行きました。この写真は、野田村の村長ですね。福島県の飯舘村の皆さんが住んでいる伊達市にも行きました。そういうぐあいに宮城県を中心にですが、岩手県、福島県にも行くということです。

全国のボランティアが大勢押しかけまして、東日本大震災から1年後の平成24年3月11日に仙台市で3.11東日本大震災・市民とボランティアのつどいを行いました。これは全部兵庫県の運営をするボランティアです。結構年配者がおりますが、兵庫県立長田高校は合唱がうまいものですから、ここに来て歌を歌わせてもらいました。歌手の五木ひろしさんは、阪神・淡路大震災の節目、節目に神戸市長田に来て歌を歌っていただいています。五木ひろしさんもぜひ参加したいということで、東京から1日完全無償で来ていただきまして、多くの被災者の前で歌を歌っていただきました。そういうこともひょうごボランティアプラザでやらせていただきました。

今は災害関連死ということで初めて定義がされて、ある一定の補償額が出ています。これは復興庁が3月にまとめた震災による死者、そして関連死、その後に亡くなられた方の数を示しております。若干の変動はあります。宮城県、福島県、岩手県はほとんど変わりませんが、福島県がもう直接の震災による死亡者以上にその後の関連死の方がふえてきました。この3月時点では全国で関連死の方が3,089名、自殺の方が117名おられるということで、阪神・淡路大震災と同じような悲劇が繰り返されているのではないかと、ちょっと心配しています。

今言いましたように、こういう自殺の方が阪神・淡路のときも大変多かったです。仮設住宅に引きこもったままの高齢者、特に男性の方が多かった。プライバシーが侵害されてうるさいぐらいにぎやかだった仮設住宅から、コンクリートに挟まれた復興住宅の一戸建ての家に高齢者の方が一人で住めばやはり寂しさとかが物すごくふえてきます。だから、私たちは愛島とか、気仙沼とか、東松島の集会所で飲まない、吸わない、賭けないというコミュニケーション麻雀を普及しています。これは、全国で高齢化社会を迎えて、高齢者、特に男性高齢者が引きこもったり、集会所や公民館に来なかったりするという現象がありますので、そういう対策でずっと広めておりました。東日本大震災が起きて、阪神・淡路大震災と同じように仮設住宅での引きこもりとか、病気とかを予防するために集会所に出てきてくださいという対策で、おしゃべり会、お茶会を開きますと女性が中心で参加したけれども、男性は引っ込みがちだったのです。なぜコミュニケーション麻雀かといいますと、我々団塊世代以上の方は大体麻雀のルールを知っています。高齢男性がリーダーになって女性の方に教えてやろうとか、自分たちがチラシを刷って、仮設住宅を回ってくるわとか言って、自発的な行動を促す意味でもこのコミュニケーション麻雀は効果があるということで、爆発的に被災地のほうで要求があります。こういう2人ないし3人1組で向こう側の方の名前を呼びながら、何々さんということで、こっちの卓をとってあげてです

ね、1メートル80センチ四方の卓なのです。こういうぐあいに、麻雀牌は竹でできておりまして、日本でつくれば10万円ぐらいかかるのですが、中国で生産してもらって5万円ぐらいできます。こういうぐあいに大人も子供も、麻雀だけでなく神経衰弱とか、七並べとか、ブロック崩しとか、いろいろな遊び方をしています。そういうことを再度復習していただくため、今週ずっと被災地のほうを回っております。NHKのニュースなど、いろいろなところで紹介してもらいました。

皆さんにボランティア・インフォメーションセンターのチラシを配布していますが、これは、私たちボランティアで阪神・淡路大震災を検証した結果なのです。実は、先ほど言いましたように被災地では震災直後に社会福祉協議会がボランティアセンターを立ち上げますが、事務所が流されたり、職員が被災者になったりして、すぐに整わなかったのです。阪神・淡路大震災のときも全国からどっとボランティアが来られました。大変うれしかったのですが、無秩序に入られたら現場は混乱します。阪神・淡路大震災のボランティアの検証結果から、次の大災害のときには被災地の近くでボランティアを前さばきする場所をつくりましょうということが提案されたのです。これを東日本大震災のときに私たちは実行したのです。私たちは仙台駅か東北自動車道でボランティアの前さばき場所をつくろうとしましたが、JRがまだ開通していなかったのです。それで、東北自動車道の旧本線泉料金所跡地に8年前に廃墟となった事務所がまだ残っております、ここを東日本高速道路株式会社からお借りしました。被災地の社会福祉協議会や県庁とかに全部御挨拶して、そちらには一切迷惑かけず、お金も人も全部兵庫県で負担しますからということで、ここに1カ月間、毎日30人ぐらい寝泊まりして、東京や名古屋から来られるボランティアを、何人ですか、どういう作業ができますかと聞いて、各被災3県のボランティアセンターと1日に二、三回情報をとりながら御希望のところに行ってもらっていたのです。これは兵庫県名産の鯉のぼりを持ってきたり、小さな鯉のぼりを飾ったりしました。途中から地元のボランティアの方もたくさん来られました。NHKがおはよう日本というニュース番組で中継したものですから、本当に多くの方に御利用していただきました。

この当時、震災から1カ月後ですから、なかなか温かい食べ物が足りません。仙台市のボランティアが、昼食を毎日つくりに行っていましたし、地元のボランティアといろいろな交流もできました。

これは宮城県の社会福祉協議会の会長、兵庫県の副知事、兵庫県の社会福祉協議会の会長ですね。こういうぐあいに東日本大震災ボランティア・インフォメーションセンターを泉料金所跡につくりました。期間は平成23年4月20日から5月15日までやりました。そのころ、被災地のボランティアセンターが活発化し、全部受援体制が整って、直接受けられるようになったのです。それで、今も岩手県や宮城県、福島県の各ボランティアセンターから情報ももらいます。ひょうごボランティアプラザの事務所にボランティア・インフォメーションセンター・兵庫という東日本大震災の情報センターが今でもあるのです。何をしているかというと、今は木曜日ですが、被災3県のボランティアセンターに電話

をして、きょう被災地にボランティアに行きたいけれども、どこに行けばいいのかというのをひょうごボランティアプラザのホームページで出しているのです。このボランティア活動支援情報は宮城県用だけれども、宮城県、岩手県、福島県と3つ出しています。ですから、九州とか、東京から行きたいのだけれども、どこに行けばいいか、きょうだったら気仙沼市とか、今は遠野市なんか毎日受け入れられています、そういうところに御案内する。詳しい情報がインターネットに載って、また見てもらう。そういう情報を毎週木曜日に更新します。その更新をしているのはこの女性ですが、実は彼女は福島県の原子力発電所から20キロの富岡町の中学校の講師をしていまして、両親と一緒に神戸市の親戚を頼って、今神戸市のほうに避難されています。彼女は兵庫県の被災地雇用の第1号でして、ひょうごボランティアプラザで今3年ぐらい働いてもらって、毎週木曜日に岩手県、宮城県、福島県のボランティアセンターに東北なまりで電話をするものですから、本当に信頼関係が生まれてきます。

先ほどボランティア・インフォメーションセンターの話をしました。それをまたいいことだということで、東日本高速道路株式会社が、常磐自動車道の東京に入る守谷サービスエリアに平成26年3月19日に防災支援の拠点をつくったのです。自衛隊も、日本赤十字社も、支援物資も、ボランティアも皆そこに集まって、一定のところに散らばっていくのを広域災害時の防災拠点として守谷サービスエリアに開設しました。ここは、普通は売店などなのですが、災害が起きれば一瞬にして災害対策本部に変わります。この原点は、東北自動車道のボランティア・インフォメーションセンターであり、その原点は阪神・淡路大震災のときのボランティアなのです。そういうことで、東日本高速道路株式会社も私どもの方にいろいろと勉強に來られまして、これからの南海トラフ巨大地震とかに備えるためのモデル第1号なのですが、中日本とか、西日本もつくりましょうということで、高台のサービスエリアの敷地を利用しています。ヘリポートもあります。また、東京のほうに行かれることがありましたら一度この辺も見学されて、これからの津波対策で、全国からの支援を受ける体制をしく場合にどういうところがいいか、サービスエリアは津波の心配がないです。空き地が結構ありますので、そういうところにつくるということも考えられます。

兵庫県は東日本大震災から3年連続でずっと兵庫県の新任職員をボランティア派遣していますが、この6月にも100名来ています。南三陸町はおとしですね。平成26年6月にも名取市閑上とかに入っています。

今ボランティアは、最初のハードなボランティアからソフトなボランティア、寄り添うボランティアに変わってきました。そして、被災された方々が震災直後はなかなか語れなかった当時のことを今お話しされます。そういうことを一生懸命聞くという傾聴ボランティアもあります。こういうぐあいに被災のときのお話を聞いたり、窓をふいたり、そして、仮設住宅の蛍光灯や換気扇の掃除もさせてもらったりしています。

ボランティアも変わってきました。毎年1月17日にテレビでやりますが、1.17希望の

灯りと書いて竹灯籠をやります。それを毎年3月10日、11日ごろに東北の被災地でもこの希望の灯りを分灯して、やらせていただいています。音楽のボランティアもあります。農業支援、漁業支援もあります。伝統文化を守るために御輿を担ぐとか、東北にはいろいろなイベントがたくさんあります。しかし、なかなか人が集まらないものですから、そういうことでボランティアを求められることがあります。仙台市の七夕祭り前日の花火大会の会場設営にひょうごボランティアプラザから毎年100名のボランティアに行ってもらっています。

去年の暮れの七ヶ浜町ですが、餅つきとか窓ふきをし、お花を配りました。そして、ことしは東北地方の太平洋側にたくさん雪が降りました。2月14日、15日に雪が降りまして、早速16日に神戸学院大学の学生に仮設住宅の雪かきに行ってもらっています。本当に太平洋側では珍しい雪だったのですが、若いボランティアに頑張ってもらいました。

兵庫県立相生産業高校が去年、陸前高田市、釜石市にボランティアに入りましたが、ことしも行っています。こういうぐあいに岩手県のほうにも継続的に入らせてもらっています。ことしの7月ですが、兵庫県立神戸高校など、兵庫県の高校生が南三陸町へ行って仮設住宅を訪問するなど、ボランティアの中身も変わってきています。

今は宮城県が中心ですが、コミュニティ・サポートセンター神戸という兵庫県の認定NPOが大槌町に継続的に入っています。さわやか福祉財団の当時理事長だった堀田力さんが一緒に支援で入っています。被災体験をした若い青年が今晚神戸から出られますが、都市再生機構岩手県震災復興支援本部大槌復興支援事務所で頑張っております。甲子園がある西宮市のにしのみや遊び場つくろう会と野田村の皆さんとの交流は今も行ったり来たりしてずっと続いています。野田村への支援もずっと入っています。阪神・淡路大震災の追悼行事に東北の被災者をお招きして、大きな地震の被災地の交流もやっています。

現在の南三陸町とか、石巻市とか名取市閑上の様子ですが、東松島市のように復興住宅が出てきたところもあります。岩手県でも復興住宅がどんどんでき上がりつつありますが、新たな問題は、いろいろな仮設住宅から入られて、そのコミュニティーがスムーズにいかないことです。高齢化のため復興住宅の役員すらいないということで、そのコミュニティー再構築に本当に社会福祉協議会、行政、そして支援員の皆さんが悩んでおります。復興住宅ができれば、新しいコミュニティーの再構築をしなければならないというのがこれからの被災県の課題になるのではないかと思います。阪神・淡路大震災では19年、20年続いています。コンクリートの中に入れば出てこられない方々の見守り活動が特に大切になってくるのではないかと思います。

この写真は宮城県庁なのですけれども、ボランティアが少なくなった中で、宮城県が鎮魂と希望千年桜回廊プロジェクトというものをつくっています。宮城県では名取から北上まで運河がありますが、この運河を挟んで官民協働で桜を植えます。ボランティアに来て植えるか、来られなかったら募金をするかして、43キロの桜堤回廊をつくっていこうという運動を5カ年のプロジェクトが始まりました。私も宮城県の河川課とも打ち合わせをし

まして、もう一度ボランティアを呼び戻す運動をしようということで、まずここから火付け役になってもらいました。名取市閑上の日和山公園ですが、まずスタートとして、去年兵庫県のボランティアで大島桜を植えさせてもらいました。宮崎県の方が桜を植えると、その方はなかなか来ることができない。その間、地元の皆さんがお水をやったりして、こういう植樹も絆が切れないという一つの効果があるということです。

兵庫県の高校の修学旅行先は、今まで北海道とか、海外とか、九州あたりでしたが、今は東北に行って、ボランティアをして、そして何か課外授業をするという学校が結構ふえてきています。北海道に行った兵庫県立姫路工業高校なのですが、被災地のボランティアをして、そして蔵王でスキーをすとかして、被災地を忘れないという気持ちが若い人たちにだんだんと芽生えてきました。高校生は阪神・淡路大震災を知りません。親や、じいちゃん、ばあちゃんからこんなに復興したのはなぜかと聞いたりしたことは覚えています。しかし、彼らが一番衝撃を受けたのは東日本大震災です。被災地を見て、被災地に入って、被災地で動いて、被災地のおいを嗅いで、これからの長い復興を大学に入っても、社会人になっても、ずっと忘れずにいこうという若い高校生が大変ふえてきました。

先ほどお話ししましたように国内でも大変災害が多いです。私たちは、近隣であろうと、九州であろうと、すぐにボランティアを集めて被災地にボランティアに行ってもらっています。これは和歌山県なのですが、近くの淡路市にも行きました。岩手のように広くはないのですが、兵庫県は日本海と太平洋に挟まれている県です。日本海側に行きますと冬場にはたくさん雪が降ります。高齢者のおうちばかりですので、神戸市から若いボランティアを連れて行って雪かきをしますし、熊本県にでもすぐに飛んで出かけます。

最近では地震とか水害だらけです。京都府宇治市の水害とか去年の山口県萩市の水害ですね。福知山市の水害、ことしの8月の徳島県を中心とした水害にも私どもはボランティアを出しています。海陽町ですね。最近では、丹波市の土砂災害に毎週2日ボランティアバスを出しています、きのうときょう行っています。私がちょうど行きました平成26年8月22日、広島県の安佐南区と緑井地区の様子です。これはボランティアセンターを立ち上げる前の様子です。この日にやっと立ち上げて、それ以降ずっと全国のボランティアが入ってこられています。

そういうぐあいに、1時間ちょっと流しましたけれども、やはり私たちが訴えたいのは災害イコールボランティアが日本を支える、そのボランティアに何かしてあげられることがないか、今から日本を背負ってくれる若い人たちにスムーズに動ける制度、環境づくりが大切ではないかと思っています。このように私もできる限り外に出て声を大にして関係議員、関係行政の皆さんにお話しして、全国津々浦々で災害ボランティアの割引制度、助成制度が必要であるということを訴えながら、先生方にも訴えてもらって、ぜひこれから災害列島日本を背負う若い人たちにいい環境をつくってあげたいなと思っています。

いろいろなところで毎月のように被災地に入っていますが、きょうはこんな貴重な時間をいただき、お話しさせていただいて本当にうれしく思っています。喜多委員長にはずっ

とお世話になります。

それから、地元の岩手日報にも時々記事にさせていただいたりしていますので、本当にありがたいなと思っています。参考になったかどうかわかりませんが、私の説明の時間は終わりたいと思います。ありがとうございました。

〔拍手〕

○**喜多正敏委員長** 大変長い間現場で実践されてきた貴重なお話、本当にありがとうございました。

これから質疑、意見交換を行いたいと思います。ただいまお話しいただきましたことに関し、質疑、御意見等がありましたならばお願いいたします。

○**工藤大輔委員** 大変貴重な御説明、本当にありがとうございました。そこで数点お伺いしたいと思います。まず初めにボランティア活動を積極的に取り組めるというのはやはり県を初めとした各種支援があるからだと思いますが、改めてそういった形での県の支援について、そしてまた民間企業がボランティア基金というのかなり大きくされていて、今日のより活動しやすい状況になってきているかとは思いますが、そういった活動に対する各種連携や支援がどのような形で進められてきたか、それまでの経緯等も含めて教えてくださいたいと思います。

また、個人としてボランティア活動する方々がふえていくということは本当にいいことだと思いますが、NGO、NPO、また各種団体も含めて自己完結できる組織体というの非常に助かる存在だと思います。それらについて人材育成というのが本当に重要で、どの地域も取り組みたいのですが、実際には人をさばけるまでの人材を育てるということは社会福祉協議会のほうでもなかなか厳しいというのが現状だと思いますが、兵庫県の事例として、なかなか整わない地域に対してこのような方法があるよというようなことがあれば教えていただきたいと思います。

そして、最後に、まず災害ボランティア割引制度等も含めた新たな制度が必要だということは、私もまさにそのとおりだなと思っております。国のほうではその運用の方法だとか、財源だとか、いろいろなところで課題があり、本当に善意で行かれる方、その制度をうまく活用されようとする方、いろいろな方がいる中で、どういった方々にどれだけの支援をするべきかという判断も難しいと思いますが、県ではこういったことがさらにできるのではないかと、兵庫県ではこうなのだよということがあれば、改めて教えていただきたいと思います。

○**高橋守雄講師** 今お話ししました、兵庫県の若い人たちがすぐ東北でも被災地でも行けるというのは、やはり阪神・淡路大震災の教訓から今の知事、行政当局、それから県議会の皆さんも含めまして、まず予算を通常からつけておるからです。やはり災害が起きたときには、兵庫県では現場における者がとっさに判断して行くという体制ができるのです。それは、後で予算というのがあります。そういうことで御協力いただいておりますのかと思ったりしております。

それから、民間のネットワークについて、岩手県のマニュアルにもありますが、災害に関する企業、組合、連合、経営者協会が、ボランティア関係連絡会議というものを年に数回持って、ふだんから顔の見える関係を築き、そしていざ災害になったらそこへ応援要請をすとか、J Cの兵庫ブロックと9月14日に締結しますが、いろいろな民間の方々との連携をやっています。企業からは、やはりそういう申し出が、いわゆる労働、商工通じて結構ありますので、そういうの方々については今できる支援とか、そういうことで一緒に被災地に入ったり、そして企業からの浄財をいただいたりできる。というのは、私どもは兵庫県でつくったひょうごボランタリープラザがあり、運営は社会福祉協議会がしていますので、弾力的にできる。寄附とかがあれば社会福祉協議会を通しますので、税控除ができるということで、そういういいところを今活用しています。

ふだんからの支援ですが、NPO、NGOに対しては、先ほど言いましたが、私どもで100億円の基金が今ありますが、果実として年間大体1億5,000万円ぐらいあります。その中で、9,000万円は兵庫県の小さな草の根運動をしているボランティアに、平成17年から、市町のボランティアセンターを通じてエントリーがあれば私どもで3万円を助成して、だんだん公的機関の助成が少なくなって、エントリーが3,500グループぐらいになってきました。9,000万円の枠は超えませんので、大体2万5,000円か2万6,000円を各グループに出しています。行政は難しいと言いますか、私どもアルコール以外はほとんどいいですよ、ジュース代や、切符代や、コピー代、何でもいいのですよ、条件は最低5人のグループがあって年間12回、毎月1回ボランティア活動する、自分たちの会合だけではないです、外に対してボランティア活動する、そういう方々に年間9,000万円。あとの4,000万円、5,000万円はNPOとかNGOのいろいろな活動に最高100万円を助成しています。時にはNPOでいろいろなプログラムありますから、最高200万円を出すところもあります。それは、被災地支援、地域づくり、まちづくり、そしてNPO大学というのを最初にやっていましたが、NPO大学もやってくれまして、NPOの人材育成をやらせていただいています。そういうぐあいにいろいろなプログラムをしながらやっています。災害ボランティア割引制度についてもやはりいろいろな意見があります。全部自己完結型ということもありますし、そして不正をどうして防ぐのかという、そういうこともあります。だから、短い距離は本当に自己完結である。ある一定の期間、ある一定の料金以上は公的証明、活動証明があれば何かの助成、補助をしていこうという試案をつくりながら、今詳細について詰めております。内閣府に提出した段階で、国でまた考えてくれると思いますが、そういう試案も提供しながら国に要請していきたいなと思っています。

○小田島峰雄委員 今ボランティアプラザの活動をつぶさに御紹介いただきました。こういう形で東日本大震災では多大な御協力をいただいておりますことにまずは心から御礼を申し上げる次第でございます。

正直申し上げます、こういった活動が行われていることを存じ上げないでございました。大変ありがたく思っております。毎年いずれかの地域でさまざまな災害が発生しております

けれども、ひょうごボランティアプラザとしてはずっとこれからも恒久的に設置され、活動されていくということなのでしょうか。

○高橋守雄講師 はい、そうです。

○小田島峰雄委員 それに対する県当局の支援と申しますか、先ほど基金のお話がありましたし、バスの使用の話もございました。県として、ひょうごボランティアプラザに対する支援というのはどうなっているのか、ちょっとお願いいたします。

○高橋守雄講師 私どものひょうごボランティアプラザでは 20 人ぐらい職員がいます。この職員は兵庫県の職員と兵庫県社会福祉協議会の職員、そして嘱託職員などです。運営に係る財政につきましては兵庫県が 99% 予算面の手当てをしています。今、当初予算で 4,500 万円組んでいます。国内の災害については 200 万円組んでいます。足らなくなれば補正を組んでおります。知事が熱心ですから、広島県、丹波市がもっともっと人が要るから補正を組みなさいと知事から指示があって、トップダウンでほんとすぐに予算をつけてくれるのです。行政ですと普通は 1 枚 1 枚書いて、上げていく途中で消えてしまうのですが、兵庫県の場合は災害に関することは知事の一発頭にありますから、僕にいつも足りないなら言ってくれよという電話がかかってきて、やっぱりこれとこれが足りません、ちょっと広島県に行く回数がふえますからもう少し積んでくださいとか、そういうぐあいに 99.9% は兵庫県の支援、助成で動いています。そのかわりいろんな宿題はおりてきますけれども、これはもう仕方ないことで、でも私は基本的には言われる前に動くという、井戸知事も現場主義ですし、知事が思う前に私は動いています。これは広島県でもそうですが、私は一人で被災地に入っているいろいろな協議を進めています。それは旅費などバックで支援してくれているから、安心して動く。ただ、現場におる者がちゃんと判断できるかどうか。今兵庫県の丹波市も相当の水害に遭っています。その支援が終わることなく広島県に行くということは、やはり県民感情を逆なですることにもなりますので、一定の丹波市の復旧が整ってから広島県に堂々と行こうかなど、広島県の方も兵庫県の災害が大変ですから、おさまってから来てくださいねと。中国地方と近畿地方はありますけれども、広島県は岡山県を越えて隣の隣の県ですから、やはり私たちは助けてもらったその恩返しをしたい。広島県にいつ行くのだと県民からずっと問い合わせがありますので、いずれかは行きますが、行くにしても予算面は心配しなくてもいいのです。行政マンとして予算面が確保されないとなかなか動けない。その分、災害に関することはどこにも増して兵庫県は知事がいろいろなことで判断しますので、そこも助かります。

○田村誠委員 私も兵庫県の支援活動にただただ敬服をさせていただいた被災地の一人でございます。おかげさまで被災地もそれぞれ何とか自立に向けて努力をしているわけですし、そしてまたボランティアの方々の多くの支えがあって、この 3 年 6 カ月というのは生きながらえてきたというよりも、それこそうちに引っ込みがちだったのがどうにか外に出てきたという感じがいたしております。改めて兵庫県の皆様の幅の広い活動に対しまして、敬意を表させていただきますし、感謝を申し上げたいと思います。

ボランティア活動の方々が大変申しわけないなと思ったのは、被災地にどんどん、どんどんボランティアがおいでいただいたのですが、被災した人たちは元気がないのか、ただボランティアの方が汗水流しながら一生懸命動くのを呆然と眺めていたことです。私もチリ地震津波を小学校6年生のときに経験をしました。その当時は、今のように5点セットだとか、仮設住宅だとか、そうしたものはほとんどなく、地元の人たちがお互い炊き出しをしながら何とか支え、そして復興に向かっていったのです。それが最近の被災地の状況というのはボランティア任せみたいな感じの空気が出てきているのではないのかなという気がしてならなかったのですが、炎天下の中、汗水流して、毎日、毎日泥上げをしていただいて、それをただ眺めているという被災地の人々の状況が見受けられました。本当に申しわけないなという気もしましたし、仕方がないのかなという気もいたしましたけれども、いずれにせよそうした被災地に向けた支援活動をこれからもやっていただけるという大変心強い話をいただきましたし、もし何かあれば窓口を通じて御相談を差し上げればいいのかという気がいたしてございます。

私はただただ感謝の気持ちだけ、その意思をあらわしたいという思いでございまして、本当にありがとうございました。

○高橋守雄委員 やはりボランティアが来ると、家の方が気を遣ってずっと何をしようかと思う。でも、私たちはボランティアをさせていただくという気持ちで行っていますので、ボランティアが来たら一日きょうは会社を休まなければいけないとか、そういうことに気を遣わすということは絶対してはならない、もう安心してらせていただけて働くという気持ちでおります。それから、やはり継続なのです。毎年1月17日もですが、毎年3月11日ごろは報道されますけれども、報道されなくても継続して被災地に来る。ボランティアが他府県から来た姿を見て、被災地の皆さんはまた元気づけられるということ、身をもって体験していますので、どこがやめようとも私たちは継続支援をしていかなければならない。それは兵庫県の行政も議会の皆さんもそういう思いですので、ほかがやめようともうちは続けていくという覚悟ですし、それだけ体力に自信がある者が参加していますから、私たちはボランティアをさせていただくという気持ちで、余り気を遣わないように、安心してどんどん使っていただくようアナウンスしてやっています。そして、やっぱりボランティアを絶やささない、風化させないということです。

○佐々木茂光委員 きょうはどうもありがとうございました。

実は、聞いていいのかどうかずっと迷っていたことが一つあります。私も今仮設住宅におりまして、3年6カ月たちますけれども、1年、2年はずっとボランティアの方々違った形で、最初は片付け、そして、先ほど先生が言われるように、例えば仮設住宅の周りの環境整備をしたり、いろいろなイベントを組んだりして、仮設住宅に入ってくるのですけれども、イベントするときみんな一緒だからいいのですけれども、そのイベントが終わると今度はみんな一人になるのです。その反動が本人には耐えられなくて、そういう呼び声にも反応しなくなってきたケースが何度かあるのです。私も切らさないようにおん

ちゃん、おばちゃんと声をかけたりするのですが、今まで農業をやっていたり、草を刈ったり、畑を起こしたり、海の人たちは海の仕事をしたり、そういう人たちが何となくそういう傾向にあるように見えてきているのです。だから、早くそこから引っ張り出さなければならぬという気持ちがあります。被災したときはみんな一緒なのだけれども、時間の経過とともに周りに人もそれぞれが抱えている問題をそこまで解きほぐせないのです。当然その方々もいろいろ波がありまして、いいときはいいし、大変なときはみんな同じような状況にいるわけなのですからけれども、そういうときにはどういうふうな声をかけるというか、例えば気合いを入れてやったほうがいいのか、思い切り引っ張り出して相撲でもとったらいいか、そう思うときがあるのですけれども、先生たちのその辺の対応というのはどのようにされているのでしょうか。

○高橋守雄講師 先生がおっしゃるとおり、今仮設住宅ではそういう現象があつて、復興住宅にかわる人、マンションを出ていく人とかで空き家がポツポツ出てきています。やっぱり集会所に集まって、イベントしましても行けない人については、今各家を訪問しています。例えばこの間は兵庫県立神戸高校の生徒が、行きたくても体が動かないから行けない人やそういう集団に行くのが苦手な人など、そういう人たちの各戸を訪ねて抹茶を持って行ったりして、こんなことは初めてだとか、そういうぐあいにおっしゃるのです。今3年6カ月たって仮設住宅の中でも格差が出てきているのです。だから、行けない人がおられるということをおもひに説明して、各家を訪問する。

それから、掃除でもボランティアに入るちょっと前に各家へ回覧板を回すのです。あなたのおうちはどこを掃除してほしいかなどリクエストをとり、そこに2人、3人配置しています。集会所のイベントに参加するのは元気な人ばかり、いつも同じような顔ぶればかりで、行けない人のことはやっぱり自分たちで動いて各戸を訪問するとか、それからもう出て行かれた方のおうちの前が草ぼうぼうですので、それを引くとかして、3年6カ月たった今、仮設住宅の住民ニーズとか、実態に合わせて活動をさせてもらっています。震災直後はみんな一緒だった気持ちが、今だんだんと格差、いろいろなばらつきが出て、そういう中でニーズを酌み取る。そして、自分たちが新たに仮設住宅の各戸を訪問していく、そういうことも重点的にやらせていただいています。

○佐々木茂光委員 実は、阪神・淡路大震災当時、私は陸前高田市で消防団だったもので、陸前高田市の青年会議所の連中で兵庫県の青年会議所に知り合いがあつて、循環風呂が欲しいということで、こっちから当時トラックで2台に積み込んで行って、向こうに設置したときがあるのですが、私から見ると、神戸市は大体町並みが戻ってきまして、復興がすごく早かったような気がするのです。私は今陸前高田市の様子を見ていて3年、4年たっても先が全然見えてこない中にあるから余計そう思うのでしょうけれども、もっと仮設住宅の暮らしなり、ひとり暮らしなり、生活がもとに戻らない時間がまだ続くように思うのです。これから家を高台移転したり、公営住宅に入居したりするといつても、それでも気持ちの整理がつかないで時間が過ぎていくような気がするのです。阪神・淡路大震災が発

災したのは平成7年だからあらかた20年になるわけですがけれども、今の神戸市の、被災者の方々の気持ちの捉え方というのは先生からはどのように見えているのでしょうか。

○高橋守雄講師 20年たって、阪神・淡路大震災で被災した方の多くが亡くなられております。それで、復興住宅の中に住んでおられる方が亡くなられて、空き家もたくさん出てきました。そういう中で、今も見守りということで巡回しているのです。それから、兵庫県の場合はこころのケアセンターをつくって、支援員の研修をしたりしています。

今復興住宅では高齢化率が高く、若い人がいない。そこで、復興住宅の役員会には必ず入らなければいけないという条件をつくりまして、学生寮のように若い学生に入ってもらいます。20年たって、復興住宅の期限切れの問題も出てきています。20年たって阪神・淡路大震災のいろいろな課題があります。そういう中で、やはり今一番の課題は先生おっしゃったように心の問題、心のケアだと思います。それからやはり復興住宅に空き家が出てきます。亡くなられた方もおります、高齢化率が高くなります。そういう中で、学生たちが寮のかわりにするとか、役員になるかわりに入ってもらうなどの方法で一緒に住んでもらうことも考えています。これはNPOが考え出したのです。

○喜多正敏委員長 ほかにございませんでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○喜多正敏委員長 ほかにないようですので、本日の調査はこれをもって終了したいと思います。

阪神・淡路大震災からずっと各被災地への支援を実現してきました兵庫県の予算措置支援体制、実現をされました知事のリーダーシップや県民の皆様、現場で実行されている高橋様の活動に対し、改めて敬意と、そして東日本大震災に長く御支援いただいていることについて本当にありがたいということで感謝を申し上げたいと思います。

本日の実に詳細な資料は、高橋様のほうで郵送していただきました。実は旅費についても花巻から盛岡までの旅費しか要らないと、まさにボランティア精神があらわれているようで、大変感謝にたえない次第であります。本当にボランティアに来る方、参加する方への御支援が必要だということについて、お話のとおりだなと思いましたので、委員の皆様への御理解と御賛同、これからもお願いできればと思っております。

災害は必ずやってくるわけでありましてけれども、それをチャンスにして、人づくりやネットワークづくり、そして列島日本の強靱化と言われているわけですがけれども、きょうじんのじんは「人」、きょうじんのきょうは「共」だなと深く思った次第であります。

先生はこれからまた三陸の被災地に向かわれるということでもありますけれども、本当に熱心に活動されているということで、大変ありがたいと思いました。感謝と、そしてこれからのますますの御活躍を祈念いたしまして、盛大な拍手でお送りをしたいと思っております。どうもありがとうございました。

〔拍手〕

○喜多正敏委員長 次に、来年1月に予定されております当委員会の調査事項についてで

ありますが、何か御意見等はありませんでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○喜多正敏委員長 特に御意見等がなければ、当職に御一任を願いたいと思いますが、御異議ありませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○喜多正敏委員長 御異議ないようでございますので、さよう決定いたしました。

次に、来年1月28日から30日に予定されております当委員会の全国調査についてありますが、お手元に配付しております平成26年度環境・防災調査特別委員会調査計画案のとおり実施することとし、その他の調査については当職に御一任願いたいと思いますが、これに御異議ありませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○喜多正敏委員長 なお、改めて調査の御希望先とか内容についてアンケートなどをお配りしたいと思いますので、これからいろいろ貴重な御意見があるかと思いますが、よろしくお願ひしたいと思います。それでは、そのように決定をさせていただきました。

以上をもって本日の日程は全部終了いたしました。本日はこれをもって散会といたします。ありがとうございました。